準地方道

札幌留萌線　其ノ一（札幌：雄冬向）

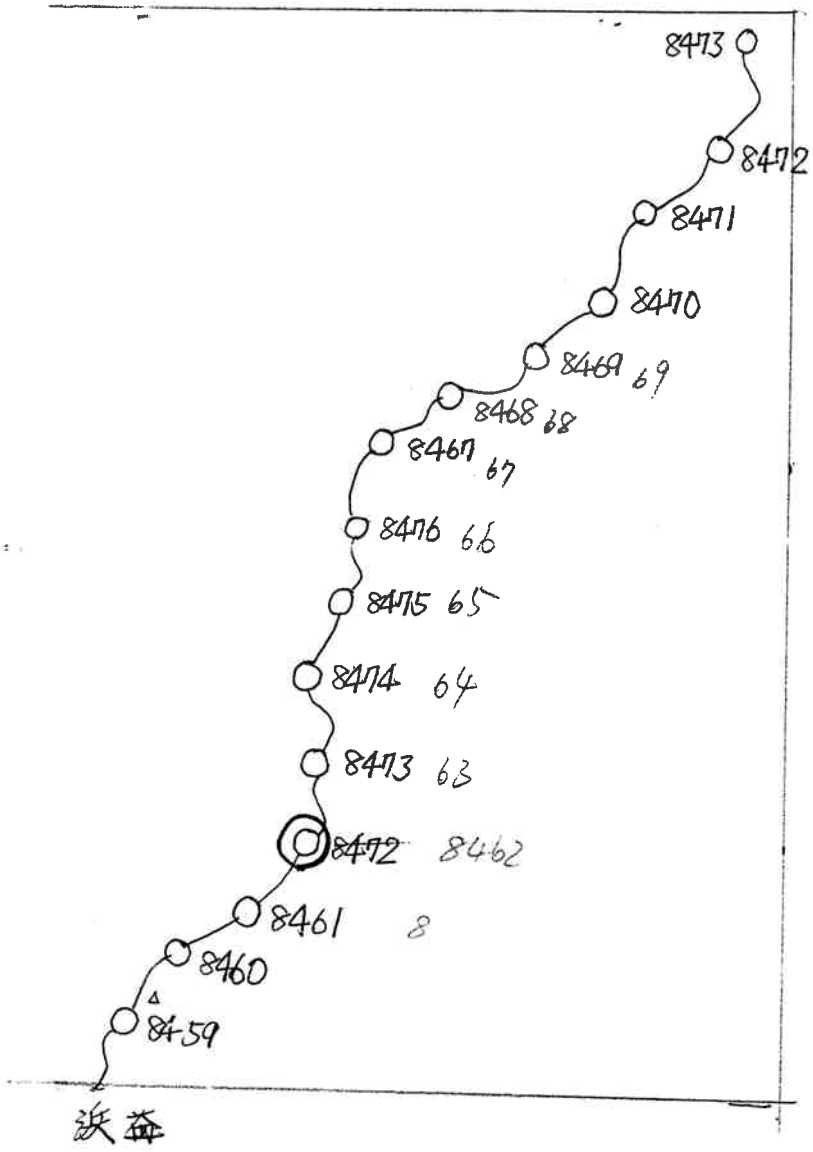
	地名	里程			累計			
		里	町	間	里	町	間	
札幌市	札幌			0			0	道庁正門横元標
	北三条東一分岐点		5	08		5	08	札幌浦河線
	札幌札幌村界		10	45		15	53	
札幌村	丘珠入口		35	33	1	15	26	
	札幌村篠路界		8	07	1	23	33	
篠路村	札幌篠路線分岐点		28	29	2	16	02	
	茨戸		18	05	2	34	07	
	篠路界		6	03	3	04	10	
石狩町	花畔		29	20	3	33	30	準石狩軽川駅線分岐点
	樽川入口	1	24	10	5	21	40	
	石狩		21	57	6	07	37	
	八幡町		8	16	6	15	53	
	石狩厚田界		20	52	7	00	45	
厚田村	知津狩白津狩		27	23	7	28	08	
	望来	1	02	20	8	30	28	
	嶺泊		26	40	9	21	08	

厚田村	古潭		25	30	10	10	38	
	小谷		24	23	10	35	01	
	厚田		29	18	11	28	19	厚田岩見沢駅線 分岐点
	厚田原標		3	34	11	31	53	
	安瀬		33	03	12	28	56	
	犬澤川		31	43	13	24	39	
	厚田浜益界 濃昼	2	13	17	16	01	56	
浜益村	尻苗		29	48	16	31	44	
	送毛		29	15	17	24	59	
	昆砂別	2	10	08	19	35	07	
	柏木		22	04	20	21	11	準浜益 滝川駅線 分岐点
	川下		9	50	20	31	01	
	茂生		15	04	21	10	05	元標
	群別		28	48	22	02	53	
	幌	1	04	48	23	07	41	
	床丹		22	49	23	30	30	
	千代志別橋	1	02	04	24	32	34	
	雄冬国境	1	32	57	26	29	31	支庁界

地籍成果閲覧・交付申請書

申請年月日	平成 7 年 8 月 16 日		第　　号
① 窓口申請 ② 郵便申請	住所	札幌市豊平区平岸8条12丁目3番55	
	氏名	桜井勝治 ㊞	
申請理由	増毛山道 調査のため.		
申請地	浜益郡浜益村大字　　村　　番地		
	浜益郡浜益村大字　　村　　番地		
	浜益郡浜益村大字　　村　　番地		
	浜益郡浜益村大字　　村　　番地		
	浜益郡浜益村大字　　村　　番地		

番号	申請事項	単位	単価	員数	金額	図面番号及び番地
ア	図根三角点網図閲覧	1 枚	500 円		円	R'10
イ	図根三角点網図複写	1 枚	1,000 円		円	
ウ	図根三角点成果閲覧	1 点	500 円		円	
エ	図根三角点成果複写	1 枚	1,000 円		円	
オ	図根多角点網図閲覧	1 枚	500 円		円	
カ	図根多角点網図複写	1 枚	1,000 円		円	
キ	図根多角点成果閲覧	1 点	300 円		円	
ク	図根多角点成果複写	1 路線	2,000 円		円	
ケ	地籍図閲覧	1 筆	200 円		円	
コ	地籍図複写	1 枚	500 円	1	500 円	
サ	細部点成果閲覧	1 点	100 円		円	
シ	細部点成果複写	1 枚	1,000 円		円	
ス	集成図複写	1 枚	3,000 円		円	
セ	地籍簿閲覧	1 筆	200 円		円	
ソ	その他複写及び証明	1 件	500 円		円	
合計					500 円	


8473
8472
8471
8470
8469 69
8468 68
8467 67
8476 66
8475 65
8474 64
8473 63
8472 8462
8461 8
8460
8459
浜奔

9月5日(火) 午後2時 分FAX

調査係 木村 様宛

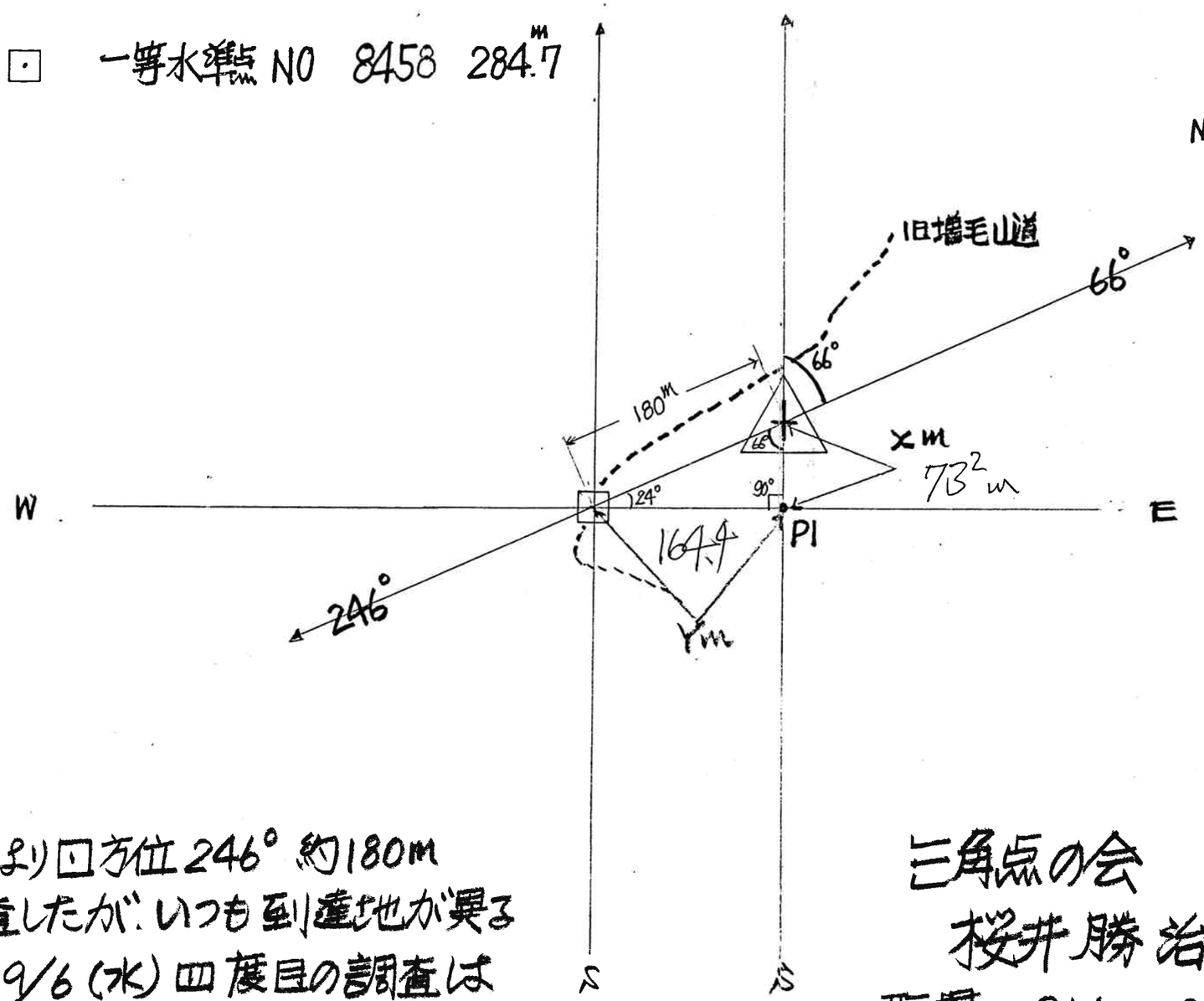
1/25000 浜益

△ 三等三角点 幌野 307.7m

□ 一等水準点 NO 8458 284.7m

△幌野 より PIまでの距離 Xm = □

□NO 8458 より PIまでの距離 Ym = □



□～△

今迄△より□方位246° 約180m を調査したが、いつも到達地が異るので 9/6(水) 四度目の調査は PIより□方向に距離をとり、246°と交又する様考えました。

三角点の会

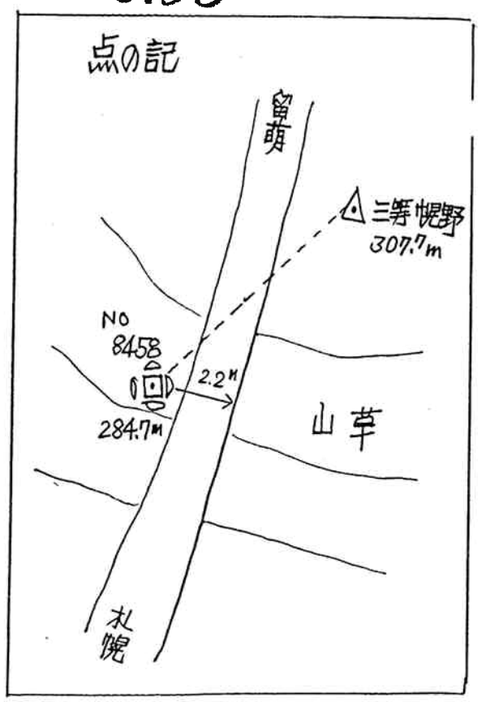
桜井勝治

転場 214～2301

パルコブックセンター

富貴堂

8458



道庁文書館蔵
A7-1
269

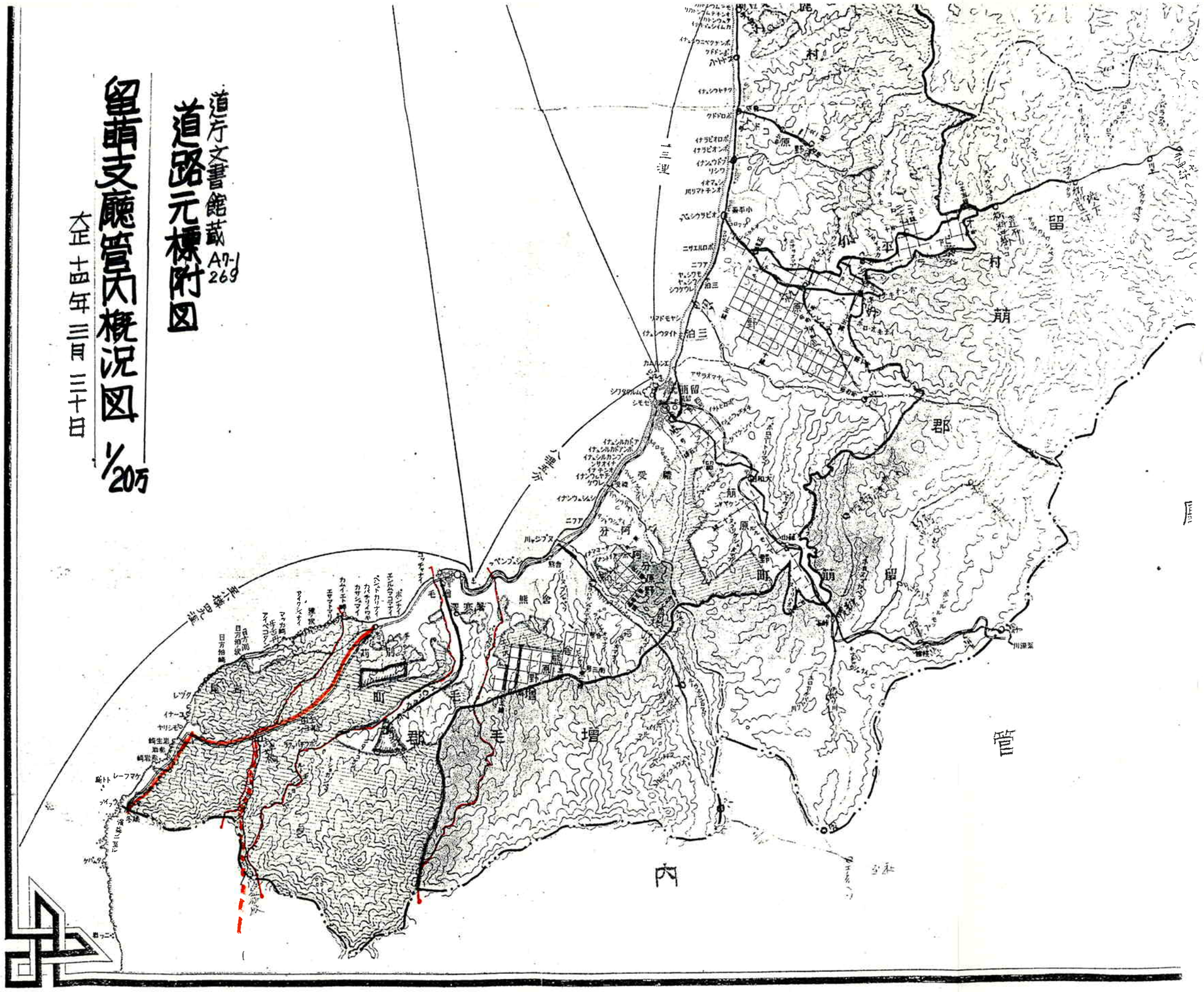
道路元標附図

留萌支廳管内概況図

1/20万

大正十四年三月三十日

札幌市北二條西三丁目一番地
印刷人　北海石版所　本間清造



南部、津軽を経て江差に渡り知人の家に寓し、翌四年夏江戸に帰つた。東遊記は江差にあつて見聞したところを記したもので、北海道に関する好史料である。その序文には東作と記してある。五年幕吏が蝦夷地のことを調査するにあたり、東作について状況を質問した。寛政元年三月八日歿した。年六十四。

だてーもとよし　伊達　基理

伊達邦直の子。文久二年六月に生まれた。明治二十四年一月父の死後家督を相続した。、同年五月二十日歿した。長男正人が家を継ぎ、二十五年父祖の功により華族に列し、男爵を授けられた。

だてーりんえもん　伊達　林右衛門

松前の富商。栖原と共に竝び称せられ数十年間本道実業界に覇を唱えた。代々林右衛門をもつて通称とした。初代林右衛門（二代附記）は陸奥国伊達郡貝田村佐藤半三郎の六男にして、同郡山崎村の農吉田林右衛門の養子となつた。資性英邁、志を立てて江戸に上り、親戚伊達浅之助に寄寓した。天明八年松前に到り、以後往来して商業を営み、寛政五年八月店舗を福山に設けた。すなわち浅之助の支店にして伊達屋と称し、林右衛門の名をもつて営業した。八年西蝦夷地マシケ場所（後増

毛、浜益二場所となる）請負人となつた。船舶数艘を所有し大阪、江戸その他諸港に海産物を移出販売し、米塩諸品を移入して自他の需めに応じた。十一年幕府が東蝦夷地を直轄するや、四月蝦夷地御用取扱箱館会所在勤を命ぜられた。ここにおいて林右衛門はしばしば諸国に旅行し、産物の販売公用品の買入等をした。享和三年養子清兵衛は箱館会所御用見習を命ぜられた。文化二年八月林右衛門は箱館在大野村近傍の開墾を企て、奥州伊達郡より農夫数名を雇入れ新田を開墾し、耕種、養蚕の業を創め伊達郷と称した。後これを千代田村に併合した。三年三月江戸霊岸島会所において蝦夷地用達を命ぜられ、扶持金七十両を給わつた。十二月苗字および継裃（つぎかみしも）を許された。六年養子清兵衛は用達見習中苗字を許された。清兵衛は家督を継がなかつたけれども箱館支店主となり、官用を勤めたので、これを伊達家オ二代　とする。七年北蝦夷場所（樺太）を林右衛門、栖原屋半助、阿部屋喜右衛門の三名に託せられたが、喜右衛門は辞退し、林右衛門と半助がその業に当つた。ここにおいて北蝦夷地に関する共同商店を設け、石狩場所請負を林右衛門、栖原屋半助、阿部屋喜右衛門の三名に命ぜられた。後林右衛、半助の両人は返上して喜右衛門一人の請負となつた。十一年八月数年間蝦夷地の事に出精勤労した功をもつて、松前河原町において屋敷地四百六十餘坪を賜わつた。十三年根室場所請負を林右衛門、栖原屋半助、高田屋嘉兵衛、亀屋武兵衛の四名に命ぜられた。十四年三名は返上して嘉兵衛一人となつた。文政元年栖原屋半助と共に江差中歌町の荒地を開墾し、かつ近傍の畑地を買入れ、貸屋百六十五棟、劇場一棟、酒造場一棟を建築し、源太夫町と称した。また蔵町の屬地を開

た

た

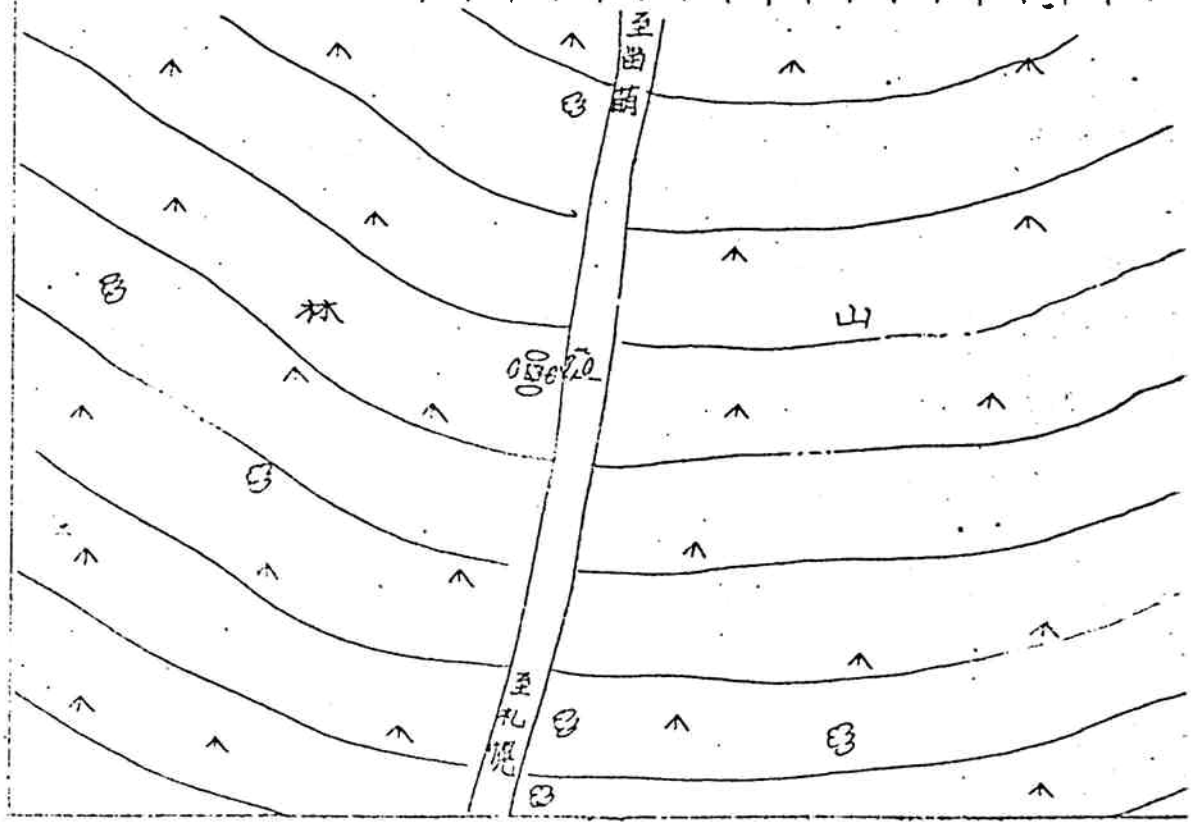
き、貸屋七十棟を建設し、影町と名づけた。十月出府を命ぜられ、翌二年正月元日幕府帝鑑の間の廊下において将軍に謁見した。三年嗣子源三郎は用達見習を命ぜられた。これを才三代とする。五年松前家の復領とともに、林右衛門は同藩用達を命ぜられた。後江戸湯島に退隠し、名を寿助と改め、天保八年二月十五日に歿した。三代林右衛門（四代、五代附記）は天保十二年十月栖原屋仲蔵と共に択捉漁場請負を命ぜられた。同処は数年薄漁続きで歿んど廃絶に瀕していたが、伊達、栖原両家の請負となつてからまた盛大となつた。弘化二年浜益、益毛二場所の内に新たに漁場二百餘箇所を開き、出稼人を招き資本を貸付けた。その後次才に漁業者を増し漁業大に発展した。嘉永五年栖原六右衛門と共に山越内場所請負を命ぜられ、元治元年同地が村並となるに至つて返上した。安政元年祖先以来の功により松前藩永世士席に列し、ついで勘定奉行となり、藩主崇広より名を賜わつて翁記と称した。しかし営業上はなお林右衛門の空名を存し、支配人片桐市作を代理人として事を執らしめた。安政二年幕府が再び蝦夷地を管するや、林右衛門は開拓の趣旨を奉じ、その請負地なる浜益、増毛に阿冬（おふゆ）山道、濃昼（どきびる）山道を開鑿し、安政三年に著手して四年に竣工した。三年仙臺藩が択捉島警衛につくや用達を命ぜられ、勤務中三人扶持を賜わつた。また幕府より武器外用品手船積回送を命ぜられた。三年翁記の嗣子が誕生しこれを四代林右衛門となし支配人市作が後見となつた。四年林右衛門は沖口収税取扱方を命ぜられた。同年翁記は松前藩の依頼により、私費をもつて福山の及部村より上ノ国村の湯岱に至る約十二里の山道を開いた（この道は実際には使用されなかつた）。安政

中白神岬近傍の荒地二万余坪を開き、樹木を移植し、蔬菜を栽培した。五年二月箱館奉行所より用達を命ぜられた。萬延元年秋田藩より用達を命ぜられ、勤務中十人扶持を賜わつた。文久三年北蝦夷(樺太)直捌場所の松川辨之助等が失敗したので、栖原半六と共に差配を命ぜられた。慶応二年正月に四代林右衛門は歿した。よつて姻戚にあたる奥州福島の山崎繁松を養子として家を嗣がしめた。これを五代林右衛門とした。三年六月樺太請負の名称を廃し、出稼の名をもつて営業した。明治二年九月全道一般に場所請負人制度は廃せられた。そして四年十二月栖原小右衛門と共に天塩国の全部および宗谷、枝幸(えさし)、利尻、礼文(れぶん)四郡の漁場持を命ぜられ、ついで択捉島漁場持を命ぜられた。五年正月十五日に翁記は歿した。翁記は資性直実、多年公私のために盡し功労頗る大なるものがあつた。明治維新以後館藩に貸付けた金額は六千九百六十円に達したが、政府より公債証書下附の命があつたとき、国恩に報いんがために献納し、六年六月銀杯三つ組を賞賜せられた。その他公益、慈善等に関して資財を義捐したことは枚挙にいとまのない程である。九年二月栖原と共同で営業していた択捉島の漁場を挙げて栖原小右衛門に譲渡した。五月樺太漁場は前年領土交換につき引払うべき命があつた。当時伊達、栖原両家の樺太における資産は概算三十六万円の巨額に上るものであつたが、損失を忍んで一意政府の命に従つた。その後政府より両家に対し下附された金員は僅に一万六千余円に過ぎなかつたといわれる。九月栖原と共同の天塩国の全部、北見国宗谷、枝幸、利尻、礼文四郡の漁場持を免ぜられた。但し稼行漁場は旧の如くであつた。しかし維新以来の変化により家運は漸く衰運に向かつたので、同年宗谷、枝幸二郡の漁場を栖原小右衛門に、利尻郡の漁業を藤野伊兵衛に、礼文郡の漁場を伊達精十郎にそれぞれ譲渡した。十年親戚故旧の協議によつて家政を改革し、十一年、十二年の両年営業したが、遂に当分休業するをもつて得策とし、所有漁場を挙げて栖原角兵衛に託し、角兵衛衰微の後は三井物産会社に託した。五代目林右衛門は後に名を翁記と改め、四十一年一月に歿し、その嗣子もまた翁記と称した(現に札幌に在住)。

149

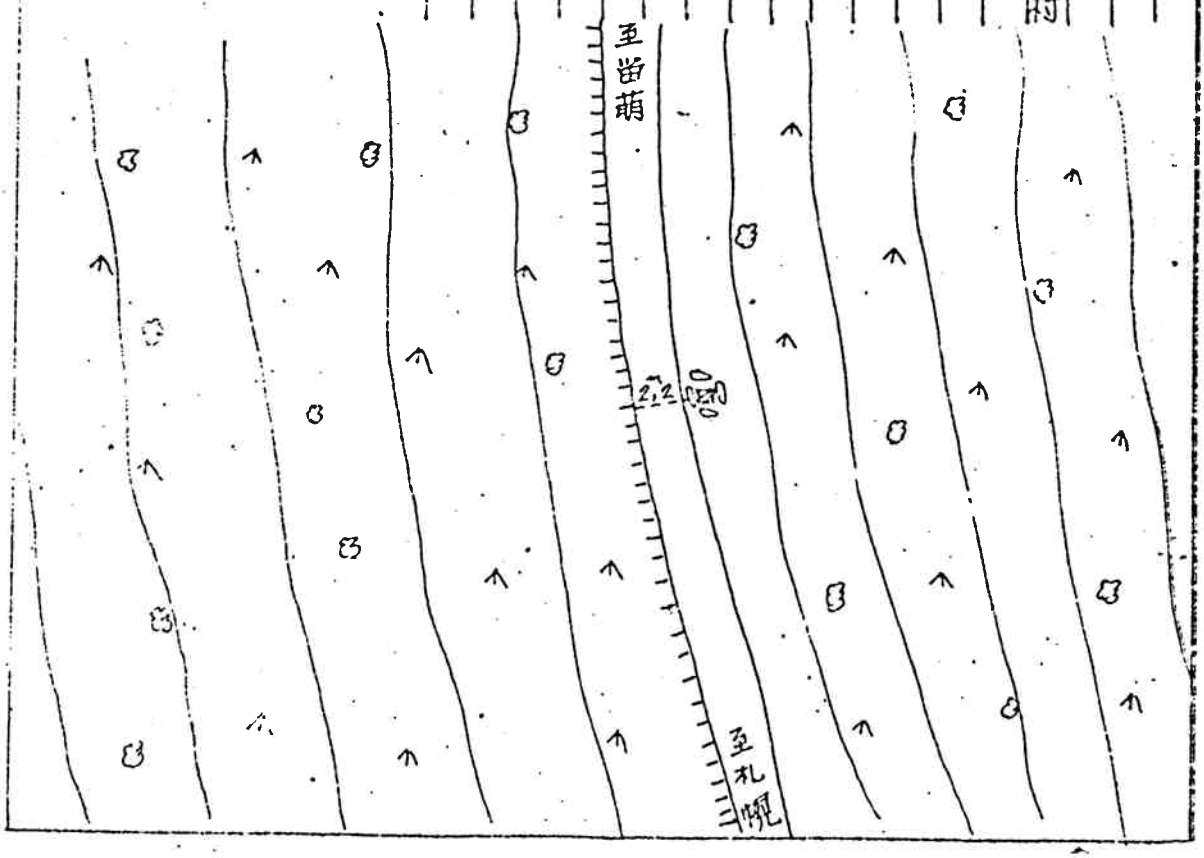
8461

所在	北海道石狩國濱益郡濱益村大字群別字幌ヶ谷橋
線路	從札幌道石狩國札幌區郡至仝道天塩國留萌郡留萌村
所有主	北海道廳所轄
地目	道路
石質	三河國産花崗石
種類	一等水準點
設定	明治四十年六月三日
埋石	明治四十年七月廿三日
觀測	明治四十二年八月二十日
班長	陸地測量部杉山正治
檢査掛	仝 古家政茂
埋定者	陸地測量手正木鼎信
埋石者	仝 仝
觀測者	仝 高野良哉
備考	8461号ヨリ8482号迄四十年度ニ於テ觀測ス濟 所衛石五個 尊 5879 5 甲 11 8 14 高 17 15 20 前＝ 右＝ 左＝ 右＝



43

所在	北海道天塩國增毛郡增毛町 大字岩尾村字——俗稱增毛山道
線路	從北海道石狩國札幌區郡 至仝 道天塩國留萌郡留萌村 ノ通路
所有主	北海道廳所轄
地目	道路
石質	三河國産花崗石
等級	一等水準點
標定	明治四十年六月四日
埋石	明治四十年七月廿六日
觀測	明治四十一年七月三十日
班長	
檢査掛	49
標定者	仝
埋石者	
觀測者	陸地測量手 高野良哉
備考	高 巾 厚 前＝20 9 6 後＝20 14 4 左＝20 13 8 右＝20 13 7 防衛石圃



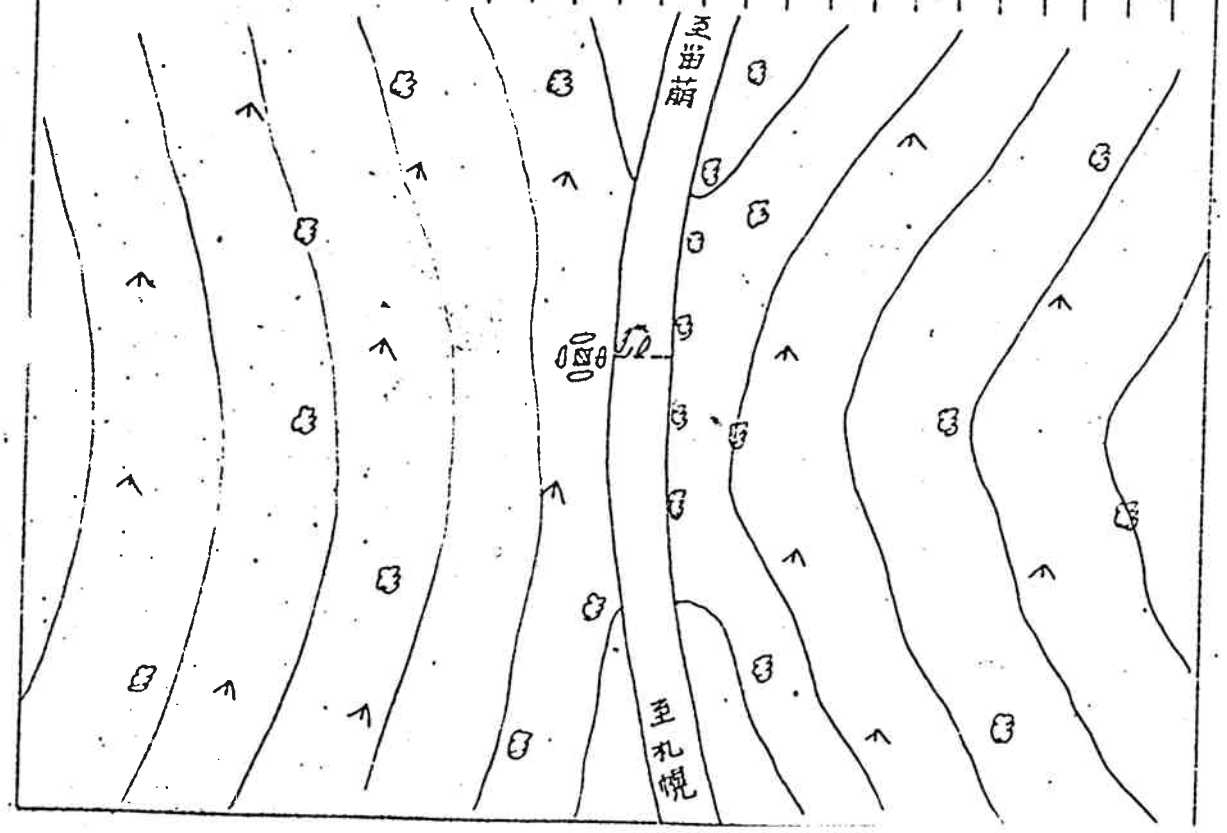
水準測量簿第五号用紙

所在	北海道天塩國增毛郡增毛町 大字別苅字一ノ沢
線路	從北海道石狩國札幌區郡 至仝 道天塩國留萌郡留萌村 ノ通路
所有主	北海道廳所轄
地目	道路
石質	三河國産花崗石
等級	一等水準點
設定	明治四十年六月四日
埋石	明治四十年七月廿七日
観測	明治四十年七月二十四日
延長	
検査科	
探定者	49 桑子仝
埋石者	
観測者	陸地測量手高野良哉

備考

	高	巾	厚
前	22	12	10
右	18	9	7
左	18	16	10
右	17	15	6

防衛石壇



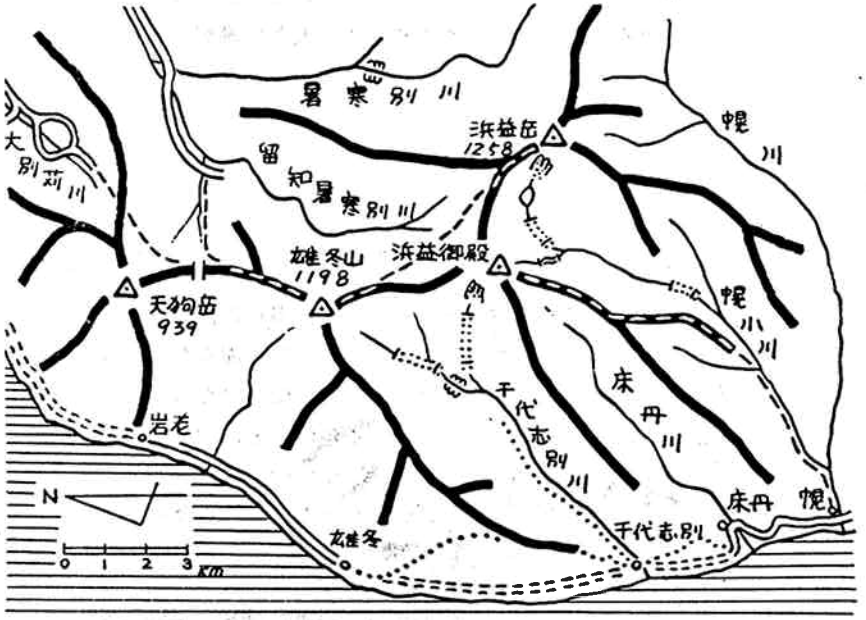
浜 益 岳

△地名浜益によると思われるが、何故にこういうかわからない。海上からの眺望による名か？

（1257.7m）

浜益・雄冬

Ⓐ幌小川　滝川から中央バス（幌行または床丹行）に乗車し、「幌」で下車。幌川の河原を歩いていくと、じきに支流の幌小川が左手から出合う。しばらく坦々とした沢を遡行していくと、やがて240m二股となり、これを越えると中小の滝が連続してくる。いずれも簡単に直登，高巻きが出来て距離をかせげる。標高700m付近の奥二股の左の沢は、浜益御殿に向かうが、右の本流



を忠実に詰める。以後も、中小の滝が連続するが、簡単に通過出来る。本流はやがて水量が少なくなり、右手に90度カーブする。このあたりから年によって、沢は雪渓の下に埋まる。やがて沢は細流となり、雨裂のザレ場で沢形がつきる。頂上近くのヤブコギが30～40分はある。沢の適当なところで幕営し、1泊2日のルートだ。 ！* 幌村→頂上（8h）

Ⓐ雄冬山からのルート　雄冬山までは雄冬山の積雪期Ⓐ、Ⓑを参照。

雄冬山方面からの浜益岳はドッシリとして見える。雄冬山の少し細い南斜面を下ってからは、浜益御殿への尾根筋を忠実に辿っても良いが、縦走中ならば、留知暑寒沢の源流に向かって下り、浜益岳に真っ直ぐ登っていく方が近い。特に技術的に難しい場所はなく、スキーを存分に活用できるルートだ。 ！*

雄冬山→頂上（2～4h）

浜益御殿

○幕末にできた増毛山道の峠がこの山の鞍部にあるので、豪勢な休み所という意味で「御殿」といったのではなかろうか。

（1038.6m）

浜益・雄冬

Ⓐ幌小川　幌小川の奥二股までは、浜益岳の無雪期Ⓐを参照。左の沢に入ると傾斜のきつい沢で、どんどん高度をかせげる。水量は少なく滑状となっていて、全部直登出来る。まもなく水が涸れ、岩石がゴロゴロした沢となり、沢は左右にゆるくカーブしながら頂上直下まではい上っている。頂上直下の平坦部までは、簡単に達せられるが、ここから頂上までのヤブコギは、ひどいアルバイトだ。頂上部は平坦で両端にピークが2つあるが、視界の悪い時には方向を失う恐れがある。 ！*　幌村→頂上（7h）

Ⓑ千代志別川　滝川から中央バス（床丹行）に乗車し、終点で下車。ここから千代志別部落までの車道は、つい最近開通したが、バスは通っていない。歩けば1時間強だ。千代志別川沿いの右岸に荒れた林道があり、標高300m付近の二股の手前まで入っている。ここから小1時間も沢を進むと、水線の二股（標高370m）となる。左手の本流を進むと雄冬山に達するが、ここでは右手の沢に入る。じきに落差のさして大きくない容易な滝が連続してくる。沢を忠実に詰めていくと、やがて水が涸れて雨裂地となり、ブッシュを30分も漕ぐと頂上直下の平坦部に出る。 ！*　千代志別村→頂上（7～8h）

雄 冬 山

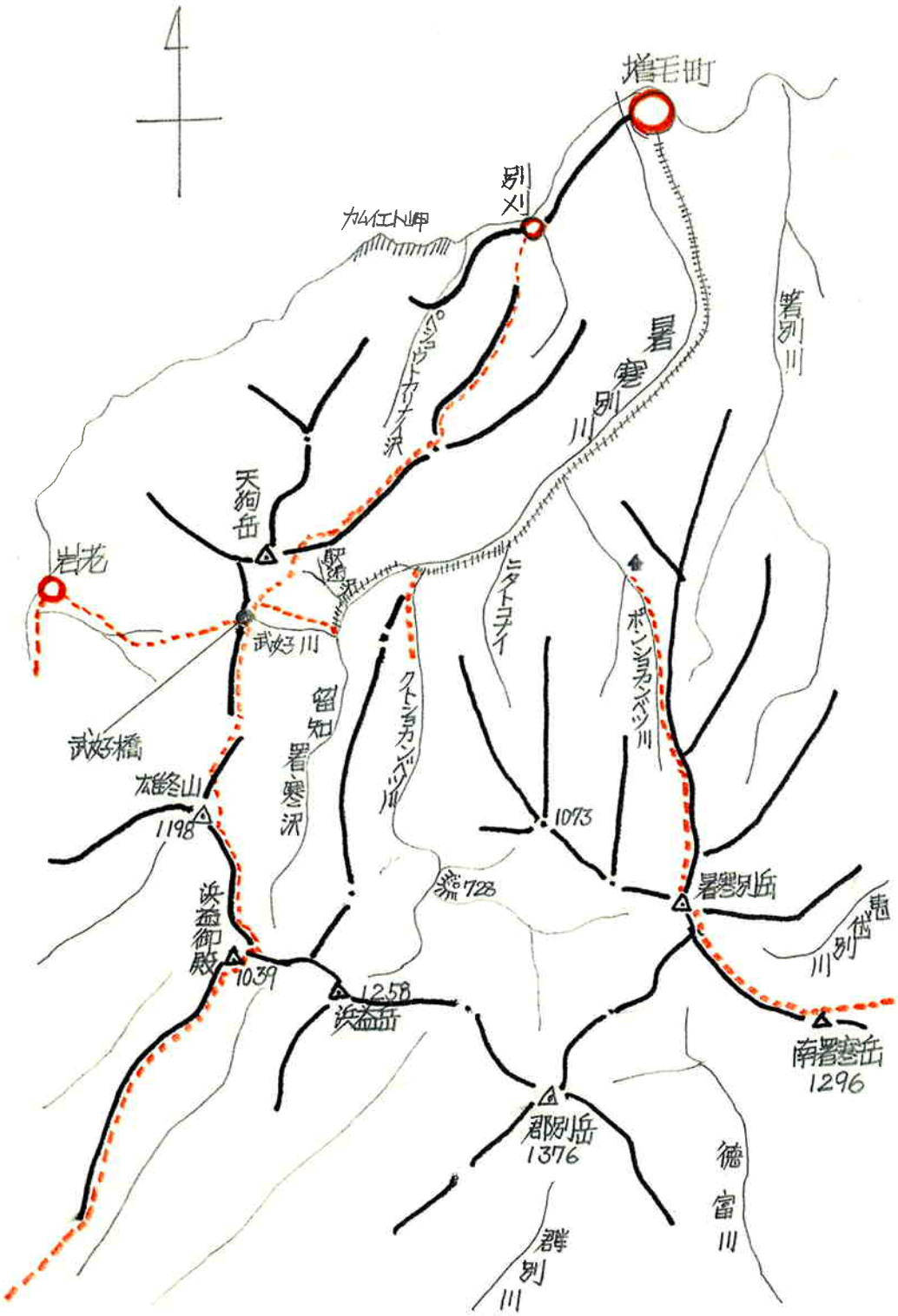
○和名は、雄冬岬にある山の義。アイヌ名は、ウフィヌプリ（火山）であったと思われる。

（1197.6m）

雄　冬

Ⓐ千代志別川　千代志別川の水線の二股（標高370m）までは、浜益御殿の無雪期Ⓑを参照。左の本流を遡行していくと、やがて函が出てくるが、増水していなければ問題なく通過出来る。ここから雄冬山までの距離は、実に長い。中小の滝が連続して数多く現われてくるが、いずれも難なく快適に通過

95.5.28
金沢文庫


増毛町
別刈
カムイエトル峠
ペシュウトカリナイ沢
暑寒別川
著別川
天狗岳
岩老
駒泉沢
武好川
ニタトコイ
ポンショカンベツ川
クトンショカンベツ川
留知
暑寒沢
武好橋
本能山
1198
1073
暑寒別岳
恵岱別川
浜益御殿
1039
1258
浜益岳
南暑寒岳
1296
群別岳
1376
徳富川
群別川

1/~1

1968 北海道林務部報《林》第209号 別刷　　'95.5.28 金沢文庫

暑寒別岳の名と増毛山道

村上啓司（森林信酒課

この山道は、古くは雄冬（阿冬）山道と称されており、ニ略松浦武四郎は、この直衛門が道を定めた時に一度、翌年完成した時に一度、二度にわたり検査官のような役でこの道を歩いたのである。

この山道は現在の国地五万分の一図にも明らかに記載されているが、昭和20年頃を境に廃道となってしまっている。

この山道を歩くことについては、地元の増毛山岳会の阿部、五日市の両氏に相談したところ、「近頃は誰も行った事がなく、山岳会も雪のときしか歩いていないのでぜひ行きたい」とのことから同行ねがえる事になった。

天候を見ながら八時半出発、留萌林

務署のご好意で、暑寒別沢林道の終点までジープで送っていたゞく。

九時半から武好川右岸の試験林の横の歩道にはいる。歩きはじめてから少々キツイとりだが、あたり一面に紫のカタクリの花がしきつめ汗は出るが爽快だ。略

坂をとりきると、広い尾根に出て、高低差のあまりない楽な道となり、前面に山道のついている雄冬山の主尾根が見えてくる。この主尾根にとりついて少し行くうちに道は急に細くなり、まばらなネマガリの中に消えてしまった。歩き出しておよそ一時間である。

一服の後、尾根筋にとることにしてネマガリやオガラバナの粗生するところを選んで一気に十五分ほどとると尾

根に出た。早速地面を探すと，紛れもない道形を発見した。両氏もコレダコレダと勇んで歩き出す。道はすぐネマガリや灌木に覆われて見えなくなる。尾根にとった処がもう50mもずれていたら、なかなか見つからなかったであろう。 ～～ 略

道はかすかにそれらしい形がある程度にどこまでも続いていて、われわれはたゞガサガサと身の丈より高いネマガリをかき分けるだけである。僅かに高低のあるネマガリをかき分けるだけである。僅かに高低のある道をコグこと一時間あまりで道を失い倒木更新らしい五、六mのトド松が10本ほど一列に立っている高みへ出た。ここは、地図に921.25とある水準点の横の高み（道有林留萌経営区十五、三二、三四の林班界）である。すでに喬木はなくなっ

ており、このトド松は限界にある貴重なものと感じたので、帰りの良い目標となった。

これから先は残雪上を楽に歩くことが出来たが、先刻から心配した雨が降っていて、暑寒別岳や雄冬山の頂上附近の雲をのぞき見しながら進む。砥組沢の水源の水を飲むと、あとは急な登りである。雄冬の主尾根を覆っている厚いネマガリを右に見ながら、まばらに生えている風衝のダケカンバの雪上を行く。さすがに旧山道らしく伐開されている感じである。ますます急になった斜面にかゝると、雨が激しく横なぐりとなる。ハイマツとクマイザサが密生している尾根にとりついだところで、あきらめて下ることとする。十二時半であった。この尾根は地図の1031.84の水準点の手前の岩記号のある道の曲

るところである。

——略

くる時にとりついた地点から先も山道跡を行くこととするが、じき道形を失ってしまう。ヤブはますます繁く、そのうえブドウなどのツタ類がはびこっているのでひどい難儀であるが、阿部氏は「おもしろい」を連発して進んでいる。無我夢中で歩いているうちに尾根をはずして左に下り過ぎてしまった

ところがツイているときはひどいもんで、これもいまは廃道になっている岩老へ通じる山道跡にぶっかった。道の状態は増毛山道と大差はないが、ここまでくると地理に明るい地元の阿部氏が強みを発揮して、古い電柱を見つけ出し、目的であった旧駅逓のあった武好橋まであまり苦労せずにたどり着くことが出来た。これから先は、道有

林の歩道がある。難渋した古道に比べるとアスファルト道よりも歩きやすく感じる。飛ぶように下って留知暑寒沢に着いたのは三時半であった。

留知暑寒沢は暑寒別川の一大支流で古くはここを通路としていたことがわかる地名である。永田地名解では、ルーチシ　ソ　カン　ペツ　嶺滝川　となっているが、ルチシは峠の意味でこの川から嶺越えで浜益側ポロクシベツ（現幌川）へ出たのである。

山道ができてから、この小さな橋のほとりに駅逓が作られた（明治5年頃）のであるが、老朽したのでいまの駅逓の沢に移されたのである。阿部氏の話しでは、この旧駅逓のことを「古つ舎」と呼び、それを知っている古老もいるとのことである。

7～7

現在駅跡の沢と呼ばれている沢は、イコスンケプイウシと呼ばれた。～略

武好川をとれば、ちょうど天狗岳と雄冬山との鞍部に出て好む方に行けるのだが、この川をとると天狗岳の急斜面に出てしまうからである。

ところが、明治26年になって、北海道庁内務部土木課の鹿島久太郎が、時の増毛外五郡郡長林顕三へ、踏査記録「増毛浜溢間道路開鑿調査報告書」を提出している。これが和人による先住民道路の調査であって、地方的にも唯一の手掛りとなるものであった。

増毛郡別刈村よりは現在人家櫛比の裏に於て予定道路敷（巾五間）を通過しそれより別苅村字大ベツカリに於てベツカリの渓流を横切り直に山腹を迂回上登す、漸次海面上七、八百呎の間を上で迂回して別苅村字タツシヤノ沉其他二、三の小渓を地形に依り迂廻若しくは横切り海面上六百弐拾呎に下る、それより山腹を迂廻して岩尾村字アイミコタン（歩古丹）海面上五百弐拾呎

より三百呎、三百八十呎の高に於て現在アイミコタン海岸の人家の上の山腹を迂廻す（山腹の息角は30度より45度に至る）ザルイシ、ヨスケ等二、三の小渡を迂廻亦は横断し遂に岩尾村字アイミコタン部落内なる。ヒカタドマリ新村落地区画本通りを通過す（海面二百六十呎）。ヒカタドマリ新村落を通過して、ヒカタドマリ渡流を右にして真直に上登し右曲同渡流を横ぎり又同渡流を右に望み山麓を蜿蜒迂廻し、ヒカタドマリ字炭焼の沢を登り右曲して又山腹を迂廻し（海面上九百八十呎）山腹の息角45度以上65.6度以下とす。

遂に天狗嶽と称する所に出ず（海面上千百七十呎）増毛岩尾村間最大高所なり。（此所に於て長さ二、三十間の手摺を要する見込なり若くは山腹を深鑿すれば或は手摺を要せざるべきか）

夫より字カモイベ、と称する瀑布の近傍迄は山腹を二、三の「乙」字型に急曲して下降す（海面上八百呎）山腹の息角は大略四、五十度とす。此処に於て、カモイベ小流を横ぎりて山腹を迂廻して二、三の小渓を迂廻若くは横ぎり岩尾村字クズレ、の沢と称する渓流の上に出ず。

海面上七百五十呎にして山腹は最も緩なり、クズレ、の渓流は海面上八百五十呎の所に於て横切る所遂に字「崩れ」の上に出ず（海面八百五十呎山腹は最緩なり）それより山腹の最も平坦なる所を二、三の「乙」字形にて下り字ユウトマリ、の上海面四百五十呎に迂廻降下す。

尚山腹を迂廻降下して遂に岩尾村海面上二百呎に下る此所に於て岩尾村新

落地の中央を通過して山腹に沿い遂に海岸に下る（前記ユウトマリ、より岩尾村に至る踏査線は硫黄採掘借区内ニ属す）

海岸を山腹に沿って字イワオナイ、渓流の来るに於て同渓流を横切り夫より同渓流の右側なる山腹を迂廻して上登す（岩尾村より海岸イワオイ、横切る所は前後少しく護岸石垣を要する見込但し用材は渓流の中に於て採取す）

同イワオイ、渓流の末に出ずる所以は渓谷深く両側頗る高き為め上流二十呎余り遡り横切する位置を選定せしと雖も適当の位置を得ず、故に岩尾村海面上二百呎より緩勾配の見込なり、以て海岸に下れり。

併し波浪の害を蒙むる患なし（此渓谷

は増毛山道字ブユス（武好）の通行屋の所に達するものにして其深さ平坦にて知るべし。　岩尾雄冬方面の人民は冬期積雪の際は専らこの渓谷より増毛へ往復す）

又二、三の小渓流を横断又は迂廻して海面を右に望み字「赤岩」の山腹（海面上五百六呎）を左に迂廻して登れば雄冬村字ケマフレ．の焼山に達す。

海面上五百六十呎にして烏帽子岩の最も奥なる高き所に上登す。（海面上千七百呎今般踏査線路最大高所なり。

夫より右に曲りて、石狩国浜益郡雄冬村字タンバッケ，の山上の平坦なる所に出ず、此所より漸次タンバッケ．を望み山腹を迂廻下降す。（山腹の息角は四十度以上或は夫より緩なり）

所向は「Z」字又は「S」字形の如くして遂に幌村部内なる字チュースベツ（千代志別）と称する渓谷へ下降し同渓谷は海面上四百呎に於て横所す（此渓谷は増毛幌向に於て最も巾広く奥は増毛山道の大山道と称する山麓に連せり。

然も南側の山腹は登り易く息角は甚だ急ならず殊に流水は巾4、5間よりなし（此渓谷の上り下りは「Z」字形に依る、チヨシベツ、の沢を横切り山腹を迂廻上登し山上の平坦地を通過して幌村字トユタン、の沢に下る此所にて二、三「Z」字形を以ち南側を上下し同小流を渡りて又山上の平坦地を通過して（海面上三百呎）遂に幌村なる郷社の前面を通過して昨年当事業手御命令ありたる厚田村より茂生群別を経由する南鑿線の終りに接続するものなり。

報告補遺

一、増毛郡雄冬村字ケマフライ、より左折せず海面上に、三百呎の所より浜益郡雄冬村と増毛郡雄冬村の両国界地字相泊、を経て中の滝と称する所即雄冬岬は断岸絶壁のみならず一方は怒涛常に岩を噛んで一歩誤れば たちまち生命を擲ざる可らざる危険の場所は当時「相泊」より浜益に通ずる一条の小径なり。

此小径は能く注意して踏査セシト雖も人馬をして安全に通行せしむる位置にあらざるのみならず、断じて開鑿の見込なき所とす。概言せば高低甚だしく距離短かく勾配を完むるに余地なきに就、増毛より両国郡村界へ通ずるには、ケマフレ、より別に岐路を雄冬村迄開鑿するを得策とす。ケマフレ、より雄冬村相泊に至

る距離は二十町余なり。

一、増毛より浜益郡幌村に至る所道を経(みち)として山腹を開鑿し大土工を避くる事に注意せり。故に現在山道に比すれば殆ど二里余の延長なるべし。

然し今日迄往来梗塞し緩急共に其不便を感ぜし雄冬、岩尾及びビアコ、コタン、其他の諸村を連絡して其利便幾何なるを知らす。

一、踏査上の結果を見る時は他日実測の際に於ては多少所向選定の斟酌を為す勢を免れず。然れども「トランシットウラーリ」をして完全なる結果を得るのみならず、曲線の如きは其曲線の箇所を除きては如何なる種類と雖も布設せらる見込なり。

一、沿道の諸村落乃ち雄冬、岩尾、アコミコタン、等の現在の民家に道路見込線下るを得ず。固より地勢上然りとす。然れども各村落に於ては前記の如く山上平坦地を撰び新市街を区画せり。故に海岸の漁場には各自適宜に私道を開鑿するを得べし、故に其不便なることなし。

以上の事由に依、増毛浜益間は既山道と海岸との間に於て開鑿の見込あると確信す。

浜益郡とその周辺

日本海に沿って石狩湾をしばらく北上した地点に浜益駅逓がある。濃昼岳・群別岳・雄冬山等が海岸に迫り出て作る数本の岬によってさえ切られた、急峻の山道の中間にいさゝかの平地があるが、これが長丁場で、難道越えの基地としての浜益である。南方には浜益・厚田間の送毛山道を挟んで入里十七丁、また北方の浜益・増毛間は九里二十三丁余。

この増毛山道越えは天下に名だたる峻嶮で、かって通行人は、雄冬岬を船で迂回する者が多かった。「西蝦夷日誌」（田川伝次郎著）によると、文化（1807年）四年時、民家八十数軒、アイヌ人二百余人も居住し、厚田・増毛間の中間に当る交通上の要衝であった。

開拓使下の明治3年10月から明治4年8月までの10ヶ月間、増毛寿の支配下となったが、駅逓業務の運営はもとより、行政面においても支配者としての特別の施策は施していなかった。

当時郡内には厚苗・清水・柏木・実田・川下・茂生・群別の七か村があり、郡には副戸長、各村にはそれぞれ「惣代・伍長」が置かれていた。